20240714　朝礼拝　エズラ記３章８〜13節

「嬉しくって泣き笑い」

「若い時の苦労は、買ってでもしろ」とか「子育てなんて、あとで振り返ってみると一瞬だし、その頃が一番いい時期だから、喜ばないとダメよ」とか、「やまない雨はないから、いつも前向きに生きよう」とか、そういう励ましの言葉を聴くことがあります。個人的には、「若い頃の苦労」が報われた人の経験、「子育てを頑張り通したこと」が喜びとなった人の経験、「人生の梅雨前線はいずれ過ぎ去ること」を知った人の経験というのは、非常に有益な情報として受け止めたいと思っています。人生の先達から頂く経験談は、いずれも大切です。もしも、自分よりも年上の人たちが、配慮して、遠慮して、自分の経験や思い出を語ることを止めたなら、私たちはこの先を生きる上での重要な指針の一つを失うでしょう。私たちの生きる現在という時間は、空中に何の支えもなく浮かんでいる風船のようにフワフワしているのではなく、一つ一つ積み上げられた過去の実績の上に成り立っています。当たり前のことですが、過去があるから、現在がある。そして、その過去を積み上げ、整えてくれたのは、人生の先輩たちです。そういう意味では、年長者を敬い、その話に耳を傾けることは、とても大切なことです。

ただ、その一方で、世界は常に進み、変わりゆくものだ、ということも意識しないといけません。縄文時代と現在、安土桃山時代と現在、江戸時代と現在。これらの比較は言うまでもなく、大きな違いを示しています。これらの比較においては、十分な年代を経ているので、明確な時代的差異が確認できます。でも、その時代的差異は、ある瞬間に、ドカンと現れるのではなく、１年単位、あるいはもっと短く数か月とか数日単位の変化の積み重ねです。私たちは、昨日とは少し違う今日を生き、今日とは少し異なる明日を生きます。そうやって、少しずつ変わり、違っていく日々を、あ

とになってまとめて振り返ってみると、ようやく大きな差異、変化が見て取れるようになります。でも、変化は毎日起こっているということです。

私たちの体もそうらしいですね。10 年分くらい、まとめて振り返ってみると、成長や老いを確認できますが、その変化は、日々の小さな新陳代謝の結果です。私たちの血液は約 4 か月で、細胞は約 1 年ですべて入れ替わるのだそうです。毎日、その変化に気付くことはできませんけどね。でも、見えないところで、感じることのできないところで、私たちの身体も、私たちの時代も少しずつ、しかし、確実に変わって行っている。

だから、私たちの思いや考えも、少しずつ変えていかないといけない。いや、正確に、丁寧に言うなら、「今、起こっている出来事を、一緒になって喜んだり、楽しんだりするためには」、私たちの思いや考えも、少しずつ変えていかないといけない、と思います。なので、逆に、いくら時代が変わろうと、いくら自分の肉体が変化しようと、「一緒になって喜んだり、楽しんだり」という願いがなければ、自分の思いや考えを変える必要はありません。譲れない考え、変えたくない思い、一生懸命に生きればこそ、そうした拘りは出てきます。どこまでも伝統を重んじ、どこまでも若い頃のように。変化を受け入れるよりも、過去の実績や成功を優先したい気持ちは、私にもあります。古文書に等しい、この聖書を読むことが好きな私ですから、時には「昔のように神様がしてくだされば良いのに」と願うことはあります。私は、基本的に未来志向ですけども、今行っている教会誌編纂の働きの中で、昔の敦賀教会に憧れることもあります。いいなぁ、って正直思います。

でも、そこのところ、神様は、非常に配慮に富み、工夫を凝らして、私たち一人ひとりの心の機微に触れて、全部が丸っと収まるように。この先の未来に、誰にとっても喜ばしい出来事を用意してくださいます。立場が違おうが、年齢が違おうが、等しく感謝し、喜べるような出来事が実現する。神様には、それがお出来になります。

今日の聖書のお話は、かつて起こった「バビロン捕囚」という悲劇的な出来事の、その直後を伝えています。この「バビロン捕囚」とは、戦争に負けて、ほとんどの国民が敵の国に連れて行かれて、強制移住生活を強いられた歴史的大事件です。そして、戦争に負けた際に、人々の精神的支えでもあった神殿も破壊され、幾重にも蹂躙された人々の姿がありました。しかし、その後に、第三国による戦争が再び起きて、敵の国が敗れたことで、囚われ人たちは、もとの神殿のあった国へと帰ることができました。そして、今日のお話です。神殿を建て直すという大事業が始まったのです。

しかし、この大事業。どうやら、年齢によって、その捉え方に、小さくない違いがあったようなのです。ちょっと整理して詳しく説明致しますと、まず戦争に負けて敵国に連れて行かれた世代がいます。そして、連れて行かれた先で新たに生まれ出た世代がいます。この 2 つの世代は、どっちが過酷で、どっちがより不幸を経験したとか、そういう比較は、あまり意味がなく、どちらも、それぞれに苦しみや悩みを耐え忍んだ世代であるかと思います。最初の世代は、戦争に負けて連行されるという苦渋を舐めました。一方で、連れて行かれた先で生まれた世代は、自分たちの本当の故郷を知りません。戦争に負けて誇りを挫かれる前の、自信が奪われる前の自分の国の姿を知らないのです。それは、それで悲しい現実です。なので、この両世代の間で、様々な認識の違い、受け取り方の違いが生じてくるのは、仕方のないことでしょう。ここ敦賀の歴史で言えば、79 年前に空襲を経験した世代と、そうじゃない世代において、故郷敦賀に対する思いが異なるのかも知れない、ということと同じです。味わい、体験し、その身に刻んだ感情の記憶が違うのですから、色々な差異が生まれて当然です。どっちが良いとか、悪いとか、優れているとか、劣っているとか、そんな話ではなくて、時代によって経験してきたことが異なるのだから、自然と、考え方、受け取り方、振る舞い方に違いが出る、ということです。

その上で、「神殿を建て直す」という大事業のお話です。ここにおいて、世代間の反応の違いが明

確に見て取れます。11 節から 12 節まで「彼らも『主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに』と唱和して、主を賛美し、感謝した。主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた。昔の神殿を見たことのある多くの年取った祭司、レビ人、家長たちは、この神殿の基礎が据えられるのを見て大声をあげて泣き、また多くの者が喜びの叫び声をあげた」と。どうやら、「昔の神殿を見たことのない」世代は、ただ主を賛美し大きな叫び声をあげた一方で、「昔の神殿を見たことのある」世代は、大声をあげて泣いて、そして喜んだというのです。かつてのことを知っているか、どうかで、目の前の出来事の意味や価値が変わってくるということですね。真実は一つでも、それを受け取る側の立場や年齢によって、その真実の解釈は大いに異なるのです。ただ、この場面において、昔の神殿を知らない新しい世代の喜びは少なくて、昔の神殿を知っている古い世代の喜びは多い、ということが記されているのではありません。注目すべきは、それぞれが、それぞれの経験に基づいて、一緒になって喜んでいる、ということです。真実は一つ、でも、解釈は色々、でも、結局は一緒になって喜んでいる。

新しい世代は、親から伝え聞いているだけの幻の神殿が、いまや目の前に実現しようとしていることに感動したでしょう。古い世代は、聖書に書かれている通り、在りし日の神殿が再建されようとしていることに、懐かしさと喜びを感じたと思います。と言うように、経験してきたこと、味わってきたことの違いを越えて、一緒に喜びを共有している人々が、ここに記されているわけですね。これぞ、神様の御業である、という、良い一例かと思います。

この私たちの教会にも、様々な年代の人がいます。教会学校の子ども達を含めれば、ほぼ一世紀分の年齢差があります。そりゃ、考え方、感じ方、受け取り方に違いは出てきます。と言うか、出ない方が可笑しいでしょう。一世紀近い人生を歩んだ御年輩の方と、ようやく小学校 1 年生になる子どもの感覚が同じとするなら、それは奇妙で不自然です。さらに言うなら、10 年ひと昔です、

10 歳差だって大きな違いになります。だから、様々な年代が集まる教会に、意見の相違が生じ、主張の食い違いがあり、時に喧々諤々言い合うのは仕方ないし、むしろ、その方が健全かも知れません。「揺り籠から墓場まで」という教会の、その極めて広い守備範囲を誇るなら、その極めて広い守備範囲で起こる様々な葛藤は、まぁ、致し方ない。

ただ、忘れないでいたいのは、たとえ年代や世代による違いがあったとしても、でも、神様は、そんな違いを乗り越えて、みんなで喜び合える未来を備えてくださっている、ということです。有り難いじゃないですか、かたや「めっちゃいいね、これ、マジでヤバいんだけど」と賛美する若者がおり、かたや、さめざめと涙を流し「そう、昔もこうだった、この実現を願っていた」と口ずさむ年長者がおり、そうやって、教会は思いを一つにしていくことができるなら。まぁ、ここ敦賀に神殿を建てるつもりは、神様含め誰もないと思いますが、でも、それに匹敵するくらいの大事業を、きっと神様は計画し、そして、私たちも、それぞれに期待して思い描いています。嬉しい出来事を前にして、大声で笑い合う人と、感激して泣き交わす人が現れる、そんな日が来るように願っています。具体的には、そうですね、この敦賀教会が、かつてのように数十人規模の子ども達を受け入れることができたなら、いいですね。礼拝出席が 50 人とか 60 人になったなら、嬉しいですね。そうなれば、かつてを思い出しますよね。まぁ、未来を思い描くなら、ちょっと控えめな願いかも知れませんが。あとは、かつての敦賀の街の賑わいが取り戻されることも願いたいですよね。新幹線効果。私は真面目に期待しています。ちょっと頼りにはならないかな、という心配がないわけじゃないですが、でも、敦賀の街が活気づき、人が増え、産業が強められ、そして、教会と幼稚園が元気になるなら、私は、新幹線効果、期待したいと思います。冷やかしたり、嘲ったりはしません。本当に頑張って欲しいし、応援しています。祈っています。私は「かつての活気ある敦賀」を知らない世代というか、新参者ですが、もし、その願いが叶ったなら、一緒に喜びたいと思います。あ

る人にとっては新鮮で喜ばしく、また、ある人にとっては懐かしくて喜ばしい。そんな未来を期待して、共に祈りを合わせたいと思います。それでは、お祈りを致します。

神さま。

今日も、私たちの上に、尊い日曜日を備えてくださり、感謝致します。今日は、少しだけ日常の忙しなさを離れて、心を落ち着けて、神様であるあなたに思いを向けたいと思います。あなたは、喜びを備えてくださいます。その形や、その時期は、私たちは分かりませんが、でも、日々懸命に生きる私たちに、あなたは必ず報いて、笑顔になれるひと時を準備してくださいます。どうか、あなたのことを知る一人ひとりが、今日から始まる１週間を、心軽やかに、足取りも軽やかに、喜び楽しんで過ごすことができますように。あなたに感謝したくなるような、嬉しい出来事が与えられますように、お支えお導きください。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。